

ミャンマーを訪ねて

ミャンマー国の概況

毎年の恒例となった東南アジア諸国での「老人ホームや病院事情の見て歩き」は、今年で4回目となる。今回はミャンマーのヤンゴンを訪れた。

JETROによるミャンマーの国勢と政治・経済に関する情報では、人口5265万人(2017年)、日本の1.8倍の面積を有し、GDPはASEAN第6位だが1人あたりGDPは最下位。1次産業と縫製業が中心で輸入超過国となっている。

ビルマ族が約7割を占めるが135の民族が住む多民族国家。1988年から軍事政権となり国勢が衰退、2011年に民政移管されるも軍の関与は継続し、完全民営化には程遠いが、工業団地建設や海外資本の導入には前向きだ。

実質賃金は、カンボジアやラオスと並び下位に位置する。ベトナムと比べて20年遅れていて、若年層の職場がなく不当労働下でのタイへの出稼ぎ問題などがあり、産業化を急いでいるが、インフラや産業は未整備の状況となっている。

ベトナム・タイに次ぐ人口の多さが潜在力となり、海外からの投資は増えている。ヤンゴン市内の商業ビル賃貸価格は高騰していて、1㎡100ドルもするが、最近では賃貸物件が増えて値崩れ現象がみられている。

ミャンマーの老人ホーム事情

国家体制が未整備で歳入が少ないため、福祉施設はまったく整備されていない。今回は、国民の8割の仏教徒や、キリスト教徒・イスラム教徒からの寄付やボランティアによって運営されている老人ホームを訪問した。

国民の97%が寄付するお手柄から、毎日の食事や施設設備は寄付で賄われ、お世話するケアワーカーの多くは、寝食を提供されたボランティアが担っている。訪れた老人ホームも、運営は篤志家に頼っている。

①老人ホーム「ニージーゴーン」

1933年、富豪によって開設され、現在はNPOが運営している。最高齢の113歳をはじめとして133人が入居している。部屋は男女別の多床室で、ベッドのみが入居者の専用スペースとなっている。入居条件は70歳以上

で、日常生活が自身でできる健康な人が、面倒をみる家族がいない経済的弱者であれば、信仰宗教や民族は問わず直接申し込みできる。病院併設で、病気の治療には入院施設も完備されているので、亡くなるまで一貫して世話をすることができる。

寄付によって運営しているため、寄付者の氏名を掲示板や壁に書いて公表している。日本の有名企業名も数社見つけることができた。某国首相夫人の名前もあった。当日は地元の医科大学生の研修ボランティアが大型バスでやってきていた。

②老人ホーム「カンダーガレー」

1923年に創設されたキリスト教系の老人ホームで、貧しい高齢者が人生を豊かに幸福に暮らし、最期まで穏やかでいられるようにとつくられた。途中さまざまな変遷があり、第二次大戦中には日本軍に接收され病院として使われていた時期もあったが、1966年に現在のかたちに整った。

シスターやボランティアによって食事や日常生活の世話が提供され、医師や看護師のシスターも常駐している。現在135人が男女に分かれ、昭和30年代の日本の病院の病室のような「ナイチンゲールルーム」で生活している。ベッドと物入れだけの狭いスペースだ。ここも入居条件は健康で自身のことができる貧困高齢者となっていて、運営は寄付で賄われている。

日本語学校で学び、技能実習生として日本で働きたいというミャンマーの若者に触れる機会があった。介護職員不足解消が目的の日本のご都合主義に、ミャンマーの若者が翻弄されないようにと祈りつつ、ミャンマーの老人ホームの改善にもつながる人材が育ってほしいと願わずにはいられなかった。



Name 田村明孝
たむら・あきたか

Profile タムラプランニング&オペレーティング代表。有料老人ホームなどの開設コンサルティングのほか、全国の高齢者施設、介護保険居宅サービス、自治体の介護保険事業計画のデータベースの収集・販売などを手がける。高齢者住宅連絡協議会事務局長。